

日本人アスリートを対象とした効果的な英会話教育開発の為の研究ノート

A Brief Report on the Development of Effective English Education for Japanese Athletes

前 川 未知雄

Michio MAEKAWA

1. 研究の目的と背景

五輪代表アスリート2名（陸上競技）を対象に、国際大会における英語によるインタビューやコミュニケーションを円滑にする為の英会話トレーニングを提供し、本研究ノートでその結果・手法を振り返ることとした。サッカー選手や野球選手の海外移籍をはじめとし、日本のアスリートが海外でプレーすることも珍しいことではなくなってきた昨今、どのような競技でも国際大会への出場や海外遠征・海外移籍等において外国語（主に英語）を使用する可能性があり、語学力はアスリートにとっての技術の一つとも言える。今後は選手だけでなく指導者の海外進出が増えることも予想される中で、日本人アスリートの英語力強化に特化した効果的な教育手法を追求したい。

2. 対象・方法

アスリートA（陸上競技/英会話学習開始時20代後半）とアスリートB（陸上競技/英会話学習開始時20代前半）の2名のトップアスリートを対象に英会話指導を行った。指導に要した時間は表1の通りである。また指導方法は、両者の 1. 文法理解力 2. 記憶力 3. 性格 の違いを考慮に入れ、アスリートAには①文法の理論的説明とそれらの正確な暗記を中心とし、②海外メディアとのインタビュー対応を模倣したロールプレイによる実践的な会話練習を提供。また、③インプット（語彙や文法等の理解・暗記）が70%、アウトプット（英会話やライティング）が30%というバランスになるようにした。アスリートAの学習内容を要約すると「正しい文法を重視し、自分自身が本当に必要とする文脈へそれらを応用する練習（インプット⇒アウトプットの流れ）」が中心であった。またアスリートBには①文法の理論的説明と同時にそれらの文法項目を実際に使用させるトレーニング（パターンプラクティスや口頭ワーク等）を重視し、②レッスンだけでなく雑談やレッスンスケジュールの調整など指導者・アスリート間の日頃のコミュニケーションを極力英語のみで行い、③インプットが50%、アウトプットが50%という比率になるようにした。アスリートBの英語学習をまとめると、「あらゆる文脈で実際に英語を使い、表現できなかった箇所の表現方法を覚える（アウトプット⇒インプットの流れ）」というスタイルを採用した。またアスリートBのインプット内容については、アスリートAとは異なり、教科

書記載の標準的な例文暗唱ではなく、あくまでも自分自身が表現・発信したい内容を出発点とし、オーダーメイドで作成した例文集の暗記を中心とした（両者の暗記内容は表2に記載する）。

表1：所要学習時間

	指導期間	指導頻度	指導時間	週間自学習時間
アスリートA	3年間	平均週2回	平均90分	2～4時間程度
アスリートB	10か月間	平均週2回	平均90分	2～4時間程度

表2：主な学習内容（語彙・文法のインプット内容）

	中学英語理解度	概算暗記量	暗記内容の内訳
アスリートA	100%	例文×850 会話例×8	<p>【暗記例文内訳】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 文法書記載の基本例文<u>600文</u> 2 競技専門用語を使った例文<u>200文</u> 3 インタビュー対応に特化した例文<u>50文</u> <p>【会話例】</p> <p>インタビュアーと陸上選手の間で交わされる典型的なレース後インタビュー会話例を8通り（900語程度）</p>
アスリートB	約60%	例文×750 語彙×100	<p>【暗記例文内訳】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 文法書記載の文法例文<u>300文</u> 2 英会話セッションにおいて英語でうまく表現できなかった箇所を記録し、例文化したもの<u>450文</u> <p>・上記例文に加えて、競技専門用語100語程度も暗記</p>

3. 結果

アスリートA

指導前：英会話経験ゼロ、中高の授業で英語に触れた程度

指導後：週2回3年間の英会話トレーニングにより、世界陸上ドーハ大会における公式記者会見にて英語使用が可能になった（通訳者による一部補助有り）。

アスリートB

指導前：英会話経験ゼロ、中高の授業で英語に触れた程度

指導後：週2回10か月間の英会話トレーニングにより、世界陸上オレゴン大会におけるレース後の英語インタビュー（世界陸上競技連盟による簡易インタビュー）にて英語による受け答えが可能になった。また海外選手との日常的なやりとりやドーピング検査員とのコミュニケーションなども可能になった。

4. 考察

今回指導した両者において、アスリートが望む英語学習の目標を概ね達成できたことから、アスリートと英語学習の相性が良いのではないかと考えた。成人の英会話学習においては、思ったような上達が得られずに挫折するケースが非常に多く、その多くにおいて日々の学習時間の少なさ（特に英会話レッスン実施日以外に自学習を続ける習慣が続かないこと）が考えられるが、トップアスリートは日々の努力を厭わないマインド・自己管理能力を兼ね備えており、努力を継続することによる成功体験も持ち合わせていることから、英会話学習における地道な反復練習への適性があるのではないだろうか。また学習方法については、指導者の成人英会話指導経験を基にした、アスリート個人のバックグラウンドに応じたアプローチが有効であったと考えられる。アスリートと一口に言っても、いわゆる文武両道を体現し学業においても秀でていた場合もあれば、学生時代より英語学習や学業全般が不得手であった場合もあるだろうが、前者のケースでは学生時代の英語学習の延長線上にある学習を、後者のケースでは英語による発信を重視した学習を実施することで、それぞれが学習成果を最大限に高められたのではないかと考えられる。

5. 今後の課題

今後より多くの指導事例を積み重ねていく中で、アスリートと英語学習の相性の良さを徐々に明らかに出来るのではないかと考えている。2023年9月以降、新たに5名のアスリート（サッカー・レスリング・ラグビー・バレーボール）の指導開始予定であり、本研究で先行した2名のアスリートの指導内容を取り入れ、成果の再現性を実現したい。またそうした指導を通して、多くのアスリートの英語学習に共通して効果的だと思われる学習項目を抽出し、上達に貢献できる最大公約数的な教材開発へとつなげていきたい意向である。